

臨床獣医師から見た

養鶏業界 43

株式会社ピーピーキューシー研究所 加藤 宏光

EDSのその後

前号の症例では、最初に発症したロットは、その後ワクチン処理をせず直ちに強制換羽を施しました。日齢が若かったため、経過は良好で、またほぼ同時に発症した三ロットは発症確認の後、三週間ワクチン接種ができなかったため、産卵率は三〇%前後落ちました。

しかし、総動員の成果か、そのほかの鶏群では発症を未然に防ぐことができませんでした。

飼料を汚染していたウイルス量が、ごく少量であったのでしょうか。もし、量が多ければ、全ロットに均等にばらまかれたウイルスにより、全農場で同時に（多発性に）発症し、緊急ワクチンは間に合わなかったに違いありません。それにしても、この被害は数千万円に及びました。

この時点で、業界ではまだ「EDSは褐色鶏に限定して起こるものだ」というのが常識となっていました。当時の日本では白色鶏の比率が圧倒

的で八〇%を超えていました。つまり、業界にかかわる人たちのほとんどは、EDSワクチンの必要性を認識していなかったのです。

ワクチンを初めてとする、疾病の予防についての難しさはここにあります。

ワクチン（だけでなく予防コストすべて）は、いわば掛け捨ての保険料です。危機が実感できないときには、そのコストはまるでムダに捨ててしまったような気がするでしょう。もし、保険に入っていない状況であれば、新たなコストを受け入れるのに抵抗があるのは頷けます。

しかし、いったん危機に陥った際には、ときに組織、企業の存続さえ左右しかねません。

本年、豊橋市にH7亜型の鳥インフルエンザ汚染が明らかにされました。その際、養鶏場におけるNDワクチネーションの実態を聞く機会を得ました。

ウズラでNDを防ぐためには、鶏に対する予防プログラムの三倍以上のドースを適応しても、まだ不十分なケースがあるそうです。ウズラ自

体鶏病への感受性が低いことも相まって、少し経営状況が悪化すれば、ワクチンのドースを減らしたり、回数減じたり……と手抜きが起きることも多いようです。

かつて「NDは一〇年周期で発生する傾向がある」と述べました。その原因は定かではありませんが、養鶏業界のみならず、こうした産業エリアからの影響を無視できないことを思い知らされた気がします。

EDSの予防にしても、汚染がさほど広がっていない段階でワクチネーションを啓蒙しても、リスクを実感してもらえません。

何せ、一〇万羽当たりで三〇〇万円以上（確実を期するなら五〇〇万円）のワクチン費用が余分に出ているのですから……。

しかし、一度感染が起きた場合、その被害はワクチンコストとは比べものになりません。今日、汚染が広範囲に拡大し、白色鶏への被害が決して無視できないものであることが業界の常識となってしまうえば、ワクチンコストが保険であることも容易に理解されます。

ワクチンの持つ意義

現在では、天然痘は、WHOが「世界中で根絶された初めての伝染病」と認知した人の伝染性疾患です。「世界中でラボラトリー（専門研究所）における研究用以外のウイルスはない」とされています。

ということとは、「世界に悪質な天然痘ウイルスは根絶されて見つけることもできない」ということを意味します。

つまり、予防の必要もありません。ワクチンもちろんありません。人類にとって、画期的な大成果とされています。

もつとも、自然界においての根絶がいかに事実であったとしても、「悪意の人種が人為的に広める」という事件が生じた場合を想定していないことに、著者は恐ろしさを感じざるを得ません。

バイオ・テロや生物兵器としての応用が画策されることは、あり得ないのでしょうか。アルカイダがニュ

ーヨークのシンボルであるツイン・ビルを破壊した頃、郵便物の汚染で大騒ぎとなった炭疽菌は生物兵器として応用されようとした歴史があります。

この細菌性疾患と天然痘の致死率はほぼ同じですから、悪性の天然痘が生物兵器として悪用される可能性は否定できないでしょう。

そのような最悪の再登場があった場合に、世界中の人類に天然痘の免疫がまったくない場合には、新型インフルエンザどころでない大問題となるのではないのか……などと心配になったりします。

天然痘と同様のことが養豚業界で考えられて、実行されつつあります。豚コレラがそれです。わが国では、豚コレラは根絶され、基本的にこれに対するワクチンは使用されません。もし、新たに発見された場合には、当該群を淘汰し、フリー状態を維持します。

著者がこの業界に飛び込んで野外での鶏病制御を指導しはじめた頃（昭和五十二年）、関東の養鶏密集地域に出向きました。

五月から野外の観察を始めて半年あまり経った頃、当時その地域で当たり前の一貫ワクチネーション・ILT（鶏伝染性口頭気管炎）の点眼ワクチンに対し、「いかにムダなコストだ」と感じていました。何せ、半年にわたってILTの気配を感じたことは、一度もなかったのですから……。

そこで、関与していた農場のワクチネーションから思いきってILTを抜いてしまったのです。それから、さらに半年あまり経過した頃、突然喀血して急死する例が散発しはじめました。

急速気管の粘膜上皮を掻き取り、急速細胞診をしたところ、間違いなくILTウイルスに由来する核内封入体が確認されました。

そのときには、この半年間に導入された鶏群三ロット（その農場全体の四分の三）はILTに対するワクチンを実施されていませんでした。慌てて人員をかき集め、大至急全群に点眼ワクチンを実施する羽目になってしまいました。本当に大失態です。

このILTは、実は、近隣農場で実施されたILTワクチネーションのウイルス（ワクチン株）が冬期でもあり、鶏群内で増幅され、環境汚染につながった結果、発生したものと判定されました。

ILTウイルスの伝播は概して遅く、ましてこの事例ではウイルス病原性が低かったため、大事には至りませんでした。伝染性疾患をワクチンで防御する際に忘れてはならない次の点を心に刻むことになりました。

①防疫は地域で行うべき
②ワクチンを止めるには浄化とその維持が可能である、という条件が必須

③多数羽飼育が前提で、かつマルチプルエイジシステムが前提のわが国では、ワクチンなしで浄化し、それを維持することは、極めて困難

こうした条件を踏まえてみると、鶏インフルエンザが摘発し、その度に淘汰という大きな犠牲を払いながらも、フリーを維持しつづけている」ということは、日本にとって大きな財産と考えるべきでしょう。

《コラム》

【EDS余話】

先に紹介したEDSの症例では、オーナーが「その侵入をオープンにしたくない」との意向を示されたことは、前号までに触れました。「同病相哀れむ」の例えで、ある生産者の好意に甘えて、かなりの羽数分を分けていただいたのですが、メーカーの営業もさるもの、いつのまにか、当該生産者を探り当てて、著者の知らぬ間に、訪問したのです。

「EDSがうちに入ったことを、メーカーに話したのか？」。

オーナーからの突然の電話に、著者は驚きました。

怒りに狂う彼のオーナーの話はこうです。

ある営業マンが突然アポを求めてきた。今後のことを考えて会ってみたところ、くだんの営業氏は次のように言い放ったそうです。「御社にEDSが入ったそうですね。EDSワクチンは私どもでしか販売しておりません。そこで相談ですが、EDSワクチンを供給する代わりに、自社製のコリーザワクチンを買ってください」。

あまりの不遜な態度に、怒って追い返したそうですが、著者がワクチンを手入するに際して、その名前を出したので、営業マンが訪問したのだと思ったのだそうです。

もちろん、著者が情報を出したわけではありません。野外の情報は思うより早く広がります。ときに事実より大きく、あるいは極端に誇張されて……！

たぶん、営業マンはおおよその当たりを付けて、訪問したのでしょう。それにしても、自社の寡占商品を、これまた自社の売れない商品とセットにして押し込もうというセンスの悪さにはほとんど呆れますが、これは独占法に抵触しないものなのでしょうか!?

著者も大いに遺憾に感じましたのでメーカー宛てに強く抗議をしました。そのためか、著者の親しいディーラーを通じて面談の申し込みがあり、何度目かの申し入れに対し、一緒に食事をすることにしました。ところが、食事の後で流れた二次会のクラブで、その営業マンはイビキをかいて眠りはじめたのです。

しばらく時間を潰した後で別れましたが、営業マンは何のために著者に面談を申し入れたのでしょうか……???

それ以来一度も会うことなく、彼は業界を離れたと聞いています。KY（空気読めない）という言葉こそ生まれていませんでしたが、当時から場の読めない人は結構いたものです。

けるように産卵が停止する例が発現しはじめます。褐色鶏の場合には、その後の産卵低下は、テキストに記述されているより激しく下降し、九〇％程度の産卵率が最悪四〇〜五〇％程度にまで低下します。また、卵殻の褪色により商品価値が大きく減殺されます。

一方、白色鶏での産卵低下は、感受性の高い鶏種で二〇〜三〇％、抵抗力のある鶏種では七〜一五％程度におさまります。もっとも、卵殻が粗くなり、B級卵が、ときに一〇％を超えるほどにもなりますから、被害は決してないがしろにできるもの

EDS拡散とワクチン

その後、褐色鶏へのEDSはアツという間に全国レベルへ拡散しまし

た。EDSワクチンを実施しなければ経営が成り立たないのですから、必須のワクチネーションとして組み込まれていきました。

一方、白色鶏におけるEDSの被害については、巷間に広がるのに随

分時間を要しました。前号までに少し触れましたが、白色鶏のEDSは褐色鶏ほど明確ではありません。同じような白色鶏でも鶏種によって相程度の被害差はありますが、多くの例ではピーク過ぎに櫛の歯が欠

た。EDSワクチンを実施しなければ経営が成り立たないのですから、必須のワクチネーションとして組み込まれていきました。

分時間を要しました。前号までに少し触れましたが、白色鶏のEDSは褐色鶏ほど明確ではありません。同じような白色鶏でも鶏種によ

た環境下では、ワクチネーションによる予防が必須のものとなります。白色鶏の事例で問題にしたいのは、なぜ白色鶏におけるEDS拡散の情

報が褐色鶏に比べて乏しかったのか、

ということですが。

これは一つに「白色鶏はEDSにかからない」という風評によるものでしょう。この風評が刷り込まれた経営者は、これほどの被害を受けていてもEDSの侵襲という可能性を除外して考えたのです。

本命を最初から除外して、対策を考えるのですから、予防対策に時間を要してしまうのは当然といえるでしょう。

EDSは、白色鶏においては病勢が（いささか）軽いという事実と、野外における事情が相まって、白色鶏のEDSに対しての意識がかなり遅れたことは否めません。

大騒ぎしてから二〇年以上も経った近頃となっても、ときに「褐色鶏と白色鶏を飼育している。現在は全部にワクチン接種しているが、褐色鶏だけのEDSワクチンで、白色鶏にはワクチンはいらないのでは？」という話を見聞きすることがあります。

この現状こそ、刷り込みという怖さを実感する事象の一つと言えるでしょう。

EDSの現状

EDSがワクチン抗体によって容易に防護できることについてはすでに述べました。現在では、ほとんどの企業採卵養鶏場ではEDSワクチンをワクチネーションに組み込んでいます。そのため、この一〇年以上の間、EDS事例に遭遇したことはありません。

これも以前に触れた事実ですが、著者の研究所で実施しているEDSモニタリングによれば、産卵率などの一般的な成績には一切不備は現われていないロットの中で、三五〇〜四〇〇日齢時に、EDS抗体が一度下降し、その後で上昇するケースがあります。

かねてから、このような例で産卵後期の卵殻異常に対してEDSが何らかの悪影響を与えているか否かの検証を行いたいと念願しているのですが……。

容易には叶わないテーマとなっています。

予想外の鶏病伝播経路

このEDSウイルスの拡散経路に、鶏ふんが大きくかかわっている可能性が高いことを紹介しました（確証がとれていないことを敢えて強調しておきます）。

野外に接していると、思いがけないルートで鶏病が侵入していることを実感します。

相当旧聞になりますが、クロストリジウム（多くはパーフリンゲンスII出血性腸炎の原因菌）が、いわゆるアンダーグラウンドのワクチンに起因していた可能性に接したこともあります。この流れについても機会があれば触れてみましょう。

今回は、クロストリジウム・パーフリンゲンス感染による出血性腸炎を紹介し、また思いがけないルートでクロストリジウム・パーフリンゲンスが侵入した事例を取り上げてみたいと思います。